琉球藍製造技術保存会

2025年度　おきぎんふるさと振興基金

報告書

申請に至った経緯

　弊会は２００２年に文化財の保存技術に認定以降、後継者育成に尽力してまいりました。

　２０２１年からは普及啓発活動にも力を入れており、毎年８月に海洋博公園にて一般向けの藍染体験会の実施や県内の各染織産地との意見交換会などを行う中で活動拠点の必要性を感じていたところ、２０２４年に町内の既存施設を活用できることになり、クラウドファンディングを行ったが整備資金が足りず、おきぎんふるさと振興基金へ応募する運びとなった。

テーマ

　活動拠点の整備

活動概要

　本事業は以下の内容に活用させていただいた。

1. 藍染体験受け入れに必要な備品の購入
2. 施設周知を目的としたリーフレットの制作

１．藍染体験受け入れに必要な備品の購入について

　購入した備品は以下のとおり。

① ホワイトボード

② モニター

③ ブルーレイプレイヤー

④ シュレッダー

⑤ ラミネーター

⑥ テプラ

⑥ スツール（作業用椅子）：３０脚

⑦ 物干し・物干し台

⑧ アイロン：２台・アイロン台：２台、あて布：２枚

⑨ 扇風機：２台

⑩ 琉球藍の年表印刷代

⑪ 作業工程のパネル印刷代

⑫ 写真（パネル）額

⑬ 平台車：８台

⑭ 棚・収納BOX類

⑮ 文具類

⑯ パソコンサプライ品　など

購入した備品の一部



モニター・ブルーレイプレイヤー・ホワイトボード



琉球藍の年表・作業工程パネルの印刷



壁掛け時計・扇風機・棚など



シュレッダー・ラミネーター・テプラ・スツール

2．施設周知を目的としたリーフレットの作成について

リーフレット1000部を印刷し、弊会施設に及び町内の主要施設や隣接市町村の博物館等に設置した。

ダウンロード → https://cdn.goope.jp/206138/260328101922-69c72c9a4ddcc.pdf





事業の総括

２０２４年度に整備を始めた弊会の活動拠点は、２０２５年度に本事業も活用させていただきながら、９月頃から藍染体験の受け入れを開始した。

本事業の該当年度である２０２５年度は約半年間で１６３名の受け入れに留まったが、伊豆味区内の子供会から婦人会、県内外・海外の染織関係者の皆様の受け入れに加えて、本部町内の旅行社様のツアーに弊会の藍染体験を組み込んでいただくなど、試験運用的に幅広いお客様に藍染体験を提供することができた。

町内旅行社様と一緒に行ったツアーの際には、満足度調査や体験料金についてアンケートにもご協力いただいて貴重な情報を得ることができ、体験メニュー及び体験料金の設定に活用させていただいた。

藍染を楽しんでいただくことはもちろんですが、琉球藍の年表や作業工程のパネルの設置は評判もよく、藍染体験以外にも染織関係者や大学生など多くの方々に足を運んでいただき、交流の場としての活用や弊会の会議の場としての活用も行なっており、活動拠点のテーマである『つながる・学ぶ・楽しむ』が、少しづつてはございますが、カタチになってきたと実感しております。



琉球新報 2026年04月05日付 17.市町村

伊豆味の藍染め 児童ら体験 本部

【本部】本部町の伊豆味小学校5、6年生はこのほど、同町の伊豆味みかんの里総合案内所で、藍染めの体験学習をした。伊豆味は琉球藍の栽培、製造に適した土地で、現在も琉球藍の主産地。児童らは「藍染めを通して伊豆味の伝統文化を理解しよう」というテーマで、総合学習をしている。体験学習では、染料ができるまでの過程などを学んだほか、実際に藍染めを体験し、地域の産業に対して理解を深めた。

文化継承へ、蚕飼育も

2024年に琉球藍製造技術保存会（滿原岱彦会長）がクラウドファンディングで資金を集め、みかんの里に併設するスペースを活動拠点として整備した。25年9月から運用を開始し、藍染め体験ができるだけでなく、パネル展示や映像資料を見ながら、琉球藍について学べる施設となっている。個人工房では受け入れの難しかった団体客や学校向けに、藍文化を普及継承するための活動を実施している。

伊豆味小の児童らは、11月中旬から学校で300頭の蚕を飼い、餌となるクワをあげたり掃除をしたりしながら大切に育ててきた。その繭から糸を取り、藍染めに挑んだ。

2月10日は、同会事務局の池原幹人さんから、藍の畑の様子や栽培方法、染料ができるまでの工程、染まる仕組みなどを学んだ。児童から「どんなことが大変か」と聞われると、池原さんは「自然を相手にする仕事なので思い通りにいかないことが大変。でも自然と一緒に生活している感じがいい」と魅力を語った。

2月17日は、池原さんの指導の下、実際に藍染めを体験した。染料の独特の匂いに、児童らは「新品のスニーカーの匂いがする」「泡盛の匂いがする」など、感想を言い合っていた。木枠に巻いた生糸のほか、一人一人がハンカチの絞り染めも体験し、出来上がった模様を披露した。

池原さんは「この規模の施設は、県内にない。後継者の育成や技術の継承をし、今後は独自の商品開発もしていきたい」と話す。4月からは、26年度の研修生の募集も予定している。（荒崎彩子通信員）

琉球藍製造技術保存会事務局の池原幹人さん（右端）の話を熱心に聞き、地域の伝統の藍文化について学んだ伊豆味小5、6年生＝2月17日、伊豆味みかんの里総合案内所

※琉球新報 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

2026年4月５日の琉球新報に掲載されました

※ 体験受入は２０２６年２月１０日・１７日

今後の課題

昨年度に続き、団体向けの藍染体験や施設見学受け入れを行なっており、今年度は特に海外からのお客様にも多く足を運んでいただき、体験していただける方々の満足度は高いように実感しているが、同時に周知の面においてまだまだ足りないことも痛感している。

先日はふるさと納税の返礼品として藍染体験の登録や、町内の旅行者や観光協会との連携を強化しながら、文化観光や教育旅行を軸に次年度に向けて準備を進めている。